

「ほんご」であそぼう　くげんだいぶんのきそく

第四回 評論②

「きのこ山」と「たけのこ里」は、自らにしか出せない持ち味や食感をしっかり体現しており、そうすることによって、互いに違う支持層を取り込んできた。

「こ」まで見てきた二者の立場の現状ができあがる前に、ある事件が起こっていた。今ではうまくバランスをとり、互いに支持を保っているが、かつてこの築き上げられた秩序が崩れかけたことがある。

一九八七年、「きのこ山」と「たけのこ里」の弟子にあたる「すぎの村」が生まれた。先輩の「きのこたけのこ」の後を追う形で、登場した彼だが、登場後まもなく、表舞台から姿を消してしまう。看過できない大きな問題が顕在化したのである。「すぎの村」は、細長いバスケットにアーモンドを携えたチョコレートでコーティングされていた。すなわち、「きのこたけのこ」の特徴の間をとるような形で、それぞれのファンを奪い合う構造が生まれてしまったのである。

「こ」の状態が続くと三人が同じ層で支持者を獲得し合うことになり、共倒れになる可能性が出てきた。そこで「すぎの村」が淘汰される形で引退することになった。生みの親によって、「すぎの村」が切り捨てられるという、全体主義に則った判断が下されたのである。

「こうして」「きのこ山」と「たけのこ里」は現在も自らのアイデンティティを保ち、ファンのニーズにそれぞれが応えることによって、菓子業界で「両雄並び立つ」存在になるという理念に向かうことを可能にしているのである。